

る食事後の食器洗い。それから靴のかかとを踏むことは、だらしなさを感じます。もし踏んでいたら注意をします。一つ一つしつけることは、大変なことです。子供のおしゃべりも私のしつけが悪いためではと反省することがあります。

我が家の次男、持って生まれたチャランポランな性格。幼いころから左ききでキャッチボールが好きだったこともあり、小学校3年のとき本人の意思で少年野球に入部しました。

何度も何度もやる気をなくしましたが、やっと試合に出られるようになりまし。スポーツを通じて人間形成ができたなら、またいろいろな苦しみ、喜びが思い出となり、将来何か役に立つことでしょ。

### 辛抱強く、ねばり強く

川村里美さん

柚木(30歳)

とかく大人の考え方が先走り、子供に強いるだけになりがちなしつ

け。一朝一夕には身につけません。

辛抱強く、ねばり強く、長い目で見てやらなければと思っています。

小学校1年と保育園児の女の子を抱える我が家では、自分でできることは自分でさせるように心がけています。親からの強制ではなく自分から進んでやってくれればと望んでいますが、つい手を出してしまうこともあり、反省することしきりです。

どんなしつけ方をすればよいのか戸惑ってしまうことが多い毎日ですが、心優しい、人に好かれるような人に育ってくれればと願っています。

### 外出は握手で送る

松永スミ子さん

落合(37歳)

我が家では、勉強は学校に、しつけは家庭でと役割分担を決めています。そんな中で、我が家の取り決めは、朝、家族全員であいさつを交わす。外でのゴミの投げ捨てはしない。人が嫌がることはしない。うそを



△交通ルールを教えるのもしつけの一つ

つかない。(幼いころ狼と少年の話をよく聞かせました) 行事等は積極的に参加する。外出するときには、家に残った者が握手をして送り出す。

以上、我が家のルールとして守っていることですが、何がしつけか、どんなことをすればしつけられるのか、いまだにわからず試行錯誤の毎日です。しかし、この寄稿を機会にもう一度しつけということを考えてみたいと思っています。

「今回の個展は、今までになく盛大にできてとてもうれい。これも皆さんのおかげだと感謝しています。」と野沢さん。野沢さんと絵との出会いは十二年前。福祉施設を出たあと、いとこの勧めでかき始めたとのこと。

その後、富士川町在住の身障画家太田利三氏に師事。本格的な制作活動に入る。

同じハンティを背負った人たちも大勢来てくれ、お互いに励まし合うことができ、改めて勇気づけられました。

両親を初め、多くの人たちに支えられ今日を築いた野沢さん。「今、かきたいと思っっている作品が二十点くらい。特に風や波をテーマとしたものをかいてみたい。」と意欲を示す。野沢さんがあれば!



昭和五十二年科展に初入選。五十四年日象展会友佳作賞、そして翌五十五年には第七回日象展厚生大臣賞を受賞し画家としての地位を確立した。

「個展開催中、



このほど、市内のデパートで5回目の個展「私の窓展」を開催した身障画家。

のざわひてのり  
**野沢秀典さん**

中 島(30歳)